



吹田市

文化財ニュース

No. 9

昭和63年3月15日

〒564 吹田市泉町1丁目3番40号

吹田市教育委員会

TEL.(06)384-1231

昭和62年度

埋蔵文化財調査事業の成果

昭和62年度の埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和62年11月から昭和63年1月にかけて、岸部北4丁目の吉志部瓦窯跡について行なわれました。

吉志部瓦窯跡では、昨年度の周辺地調査によってロクロピット、粘土採掘坑等の工房関連遺構が新たに検出され、造瓦工房の実態を解明する上で貴重な成果が得られたところです。

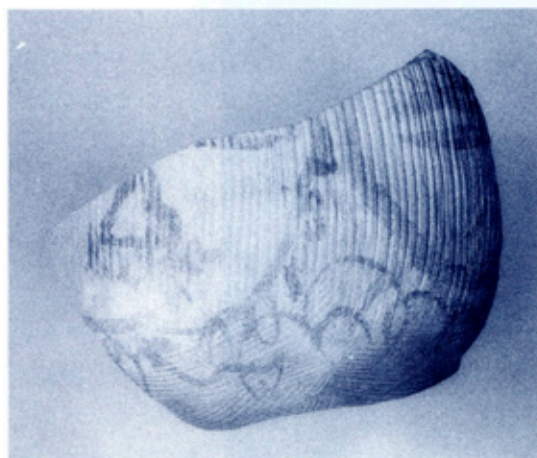
今回の調査においても、瓦窯操業期の溝、土竈等を検出し、また、平安時代の土層の下からは古墳時代の落ちこみ遺構も検出されました。特に後者は紫金山丘陵周辺で行われていた須恵器生産の操業期のものとして注目されます。

また、南吹田下水処理場増設にともなう調査として行なわれた五反島遺跡の内業調査が、昨年度に引き続き行なわれました。今年度は膨大な出土遺物に対して詳細な調査が開始され、そのなかで新たに墨書人面土器が確認されました。



▲吉志部瓦窯跡 溝・土竈(平安時代)

墨書人面土器は土師器の甕に墨で人の顔を描いたもので、奈良時代から平安時代にかけて、溝や河川等の祭祀に用いられた、穢れを払うまじないの遺物として使用されたと考えられており、平城京や長岡京で多く検出されています。五反島遺跡における祭祀の実態を明らかにする上で重要な資料といえます。



▲五反島遺跡出土墨書人面土器(平安時代)
土師器の甕に顔が2面描かれています。



▲左写真見取略図

吉志部瓦窯跡の調査

吹田市の中央から北半部は千里ニュータウンや万博公園のある丘陵地帯が広がっていますが、この丘陵は千里丘陵と呼ばれ、軟らかい粘土や砂と礫から成り立っています。

この粘土は焼き物を作るのに適した良質の粘土であり、千里丘陵では、この粘土を使って、古墳時代には須恵器と呼ばれる、朝鮮半島から技術の伝わった陶質土器の生産が盛んに行われました。丘陵西北の豊中市域と、東南の吹田市域に、約1世紀半の間に、計100基以上の窯が操業していたと考えられ、「千里古窯跡群」と名付けられた全国でも有数の窯業地帯であり、大阪府南部の「陶邑古窯跡群」とともに、須恵器生産の中心的な役割を果たしていたと考えられます。しかし、この千里古窯跡群も7世紀にはいと、衰退に向かい、中頃にはその生産活動を終えています。

このように古墳時代の終わりとともに、千里丘陵は窯業地帯としての歴史を一旦は終えるのですが、良質の粘土を産することや、窯を築くのに適した地形・地質あるいは、一大窯業地帯を支えていた伝統等を要因として奈良時代、及

び平安時代に再び、窯業地帯として登場してきました。

奈良時代の聖武天皇による難波宮の整備に際して、宮殿に使用された瓦が、岸部の地にある七尾瓦窯跡で焼かれていたことが昭和53年に明らかとなりました。

そして、七尾瓦窯跡が活動を終えてから、60余年後、桓武天皇による平安京の造営に際しても宮殿用瓦が吉志部瓦窯跡で焼かれています。

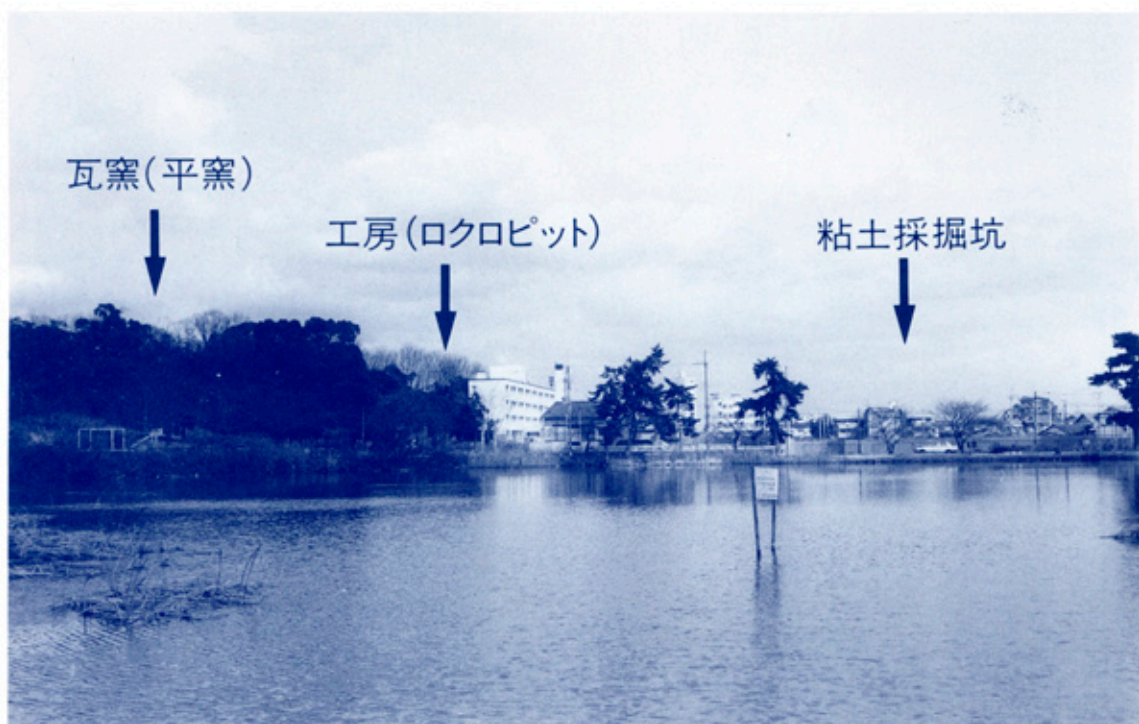
このように岸部という同一の地に難波宮、あるいは平安京の造営といった、大規模な事業に伴う官営の工房址が営まれるということは、他の窯業地帯でも少なく、岸部一帯の古代の歴史的な位置を考える上で注目されます。

なかでも、吉志部瓦窯跡は古くから、注目されており、天坊幸彦、藤沢一夫、鍋島敏也の諸氏によって報告されてきました。特に藤沢一夫氏は、本瓦窯跡は平安京の造営当初において宮で使用する多量の瓦を生産するために、臨時的に設けられた瓦窯としての歴史的な位置づけを行い、その重要性を明らかにしました。

吉志部瓦窯跡は昭和43年2～3月には、大阪



◀吉志部瓦窯跡（現在は史跡公園として整備されています）



▲吉志部瓦窯跡遠景(南西から) 瓦窯(平窯) 工房(ロクロピット) 粘土採掘坑

府教育委員会によって調査が行われ、4基の窯が発掘され、その構造が明らかにされるとともに、合計13基の窯の存在が確かめられました。調査によって明らかにされた窯の構造は床の傾斜する登窯と、平らな平窯の2種類がありますが、主に平窯で瓦が焼かれ、登窯では釉薬をかけた緑釉瓦と緑釉陶器が焼かれていました。

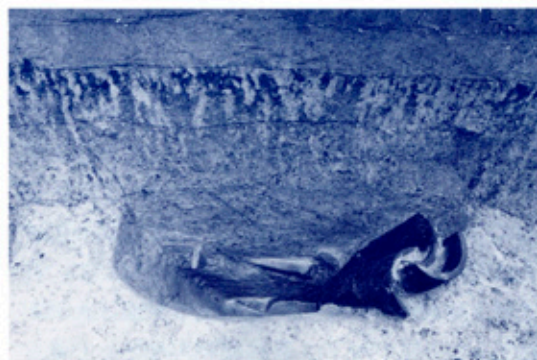
また、これらの窯は同じ構造と規模であるとともに、規則的に並んで築かれており、非常にしっかりとした、造瓦体制のもとで生産が行われていたと考えられます。

この調査によって、吉志部瓦窯跡は古代窯業技術史上、重要な位置を占めるとともに、窯が良好な状態で残っていることが明らかとなり、この窯跡群を保存するために、昭和46年6月には国の史跡に指定され、永久的に保存が図られるとともに、史跡公園として整備され、現在では市民の憩いの場となっています。

瓦窯については、このように良好な状態で保存されてきましたが、瓦窯に伴う造瓦工房の実態は明らかではありませんでした。工房址の存在が考えられた丘陵周辺は近年、開発が徐々



▲吉志部瓦窯跡粘土採掘坑



▲吉志部瓦窯跡 ロクロピット



▲ロクロを使用した土器作り(「天工開物」部分)
(宋應星撰、載内清訳註「天工開物」東洋文庫より)

に進行してきており、その景観も変わってきています。吹田市教育委員会では、このような開発に対処して、昭和62年1月から3月にかけて、公共事業にともなう事前調査、及び確認調査として、史跡指定範囲南方の吹田市岸部北4丁目390、他の2ヵ所において、調査を行いました。

調査地は、瓦窯のある地点から約7m下った丘陵端の平坦な地点であり、瓦、あるいは陶器(緑釉陶器)を成形するための、回転台等の作業台の痕(ロクロピット)が2ヵ所みつかりました。また、もう1ヵ所の調査地は、さらに3m下った丘陵端に接する地点で、原料土としての粘土を採掘するための、粘土採掘坑が15ヵ所も見つかっています。

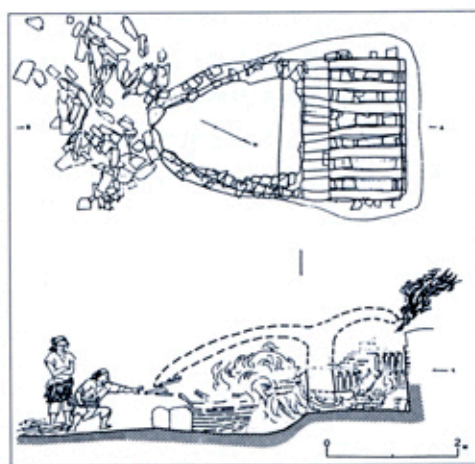
最近関東では、須恵器の窯跡の調査に伴い、粘土の採掘坑の調査例が増えていますが、畿内ではまだ調査例は多くありません。関東地方で調査された、須恵器に伴う採掘坑は平面も不整形で、規模もバラツキがあり、次々に掘り広げられていったものと考えられるのに対して、吉志部瓦窯跡でみつかった採掘坑は平面は大半が長方形に近く、また、各採掘坑もほとんど重なることもなく、あらかじめ、採掘する粘土の量

と時期を決め、計画的に採掘を行ったものと考えられます。

この採掘坑から掘り上げられた粘土は、しばらくねかされてから、練られ、ロクロピットが見つかった作業場で瓦、あるいは土器に形造られます。その際に回転する台の上で作業を行いますが、今回見つかったのは、その回転台の軸をうける痕と考えられます。但し、今回は調査面積が限られたことから、その詳しい構造や、作業台が関東の調査例のように屋内にあるものか、あるいは屋外のものか、今後、詳しく調査を進めていかなければなりません。

そして、生瓦ができあがると、乾燥させてから、窯で焼かれます。

このように、瓦、あるいは緑釉陶器の製作においては、原料粘土の採集・粘土の精製・成形・調整・焼成、製品の選別・搬出という一連の工程がありますが、これまで、吉志部瓦窯跡で明らかになっていたのは瓦窯周辺のみであったことから、実際にその全製作工程を明らかにすることはできませんでした。従って、今回の調査によって窯体以外の、工房等の作業場が明らかになったことによって、瓦の製作工程の一端が明らかになりました。今後、さらに調査を進めていかなければなりません。長い歴史を持つ吉志部瓦窯跡の研究に新たな段階を迎えるとともに、畿内では調査例の少ない造瓦工房の一部が確認できたことから、非常に重要な調査例であり、さらに、周辺における調査が期待されます。





▲上空から臨む現在の積迦ヶ池

積 迦 ヶ 池 の こ と

山 口 最 子

私たちが長年住み慣れた現在の吹田市五月が丘は、昭和61年に町名変更されたもので、以前は山田下と小路、七尾の境となっていました。

その当時は、この広い地域に家は一軒だけで番地もよくわからず、岸部七尾鴨池北とっていました。鴨池という名は、昭和の初め頃まで盛んにアジ鴨が来て、鴨捕り場であったため一般的には積迦ヶ池といわれています。またの名は、「ジャガイケ」で、蛇の住む池として、まわりから驚かされていました。鴨が来るので、なるべく人が近づかないようにしたのかもしれませんが。

積迦ヶ池の南側の山、紫金山には、吉志部神社があり、春・秋の祭は古式で、春は祭の後の直会に、みやまつつじの下で、弁当と酒を酌み交わす山遊びがあり、秋には、「ドンジ」といって、当屋が白蒸しのおにぎりなどを齋戒沐浴して作り、唐櫃に入れ、行列をして神社へ持って

行く神事がありました。この祭には里人に人身御供を強要していた大蛇を退治した伝説が伴っており、主人公の吉士俊守が馬に乗って、池のあたりを見まわしていると、白い蛇が馬の足のあたりに絡みつくので、これを刀で切り捨てると、池の水が血の色に染まりました。そして、それ以後は人身御供は絶えたという内容です。主人公は難波吉師の末裔といわれ、このあたりの名主だったのかもしれませんが。

積迦ヶ池の西には龍ヶ池、東の方には津志長池があり、もう小さくなったり、開発で埋められたりしましたが、そのどちらも龍や蛇を感じる名前です。積迦ヶ池は中央を名神高速道路が横切り、北側の丘は区画整理事業が行われて、マンション街になりましたが、池のまわりは公園となったり、自然の池と緑が残されました。しかし、30年程前のように、鴨が来たり、カイツブリが水くぐりする姿はめったに見られなく

なりました。

チャン チャン チャンブクロ、
チャブクロのあたりに火がつ
いた。すっこめ、すっこめ。

などと唄って子供が岸からはやした
てた鳩は、茶袋の形に似ていたので
しょう。高速道路が開通する前の池
の水はきれいでしたので、この岸の
ほとりて洗濯をしていました。洗濯
の終わった後など、水鳥の遊びを見
ているのは、子供でなくとも楽しい
ものでした。

この池には、「ジャクカン」があり
ました。これはおそらく「雑魚干」で
しょうが、ゆかいで楽しい池さらい
がありました。このことは、古老によ
く聞いておきたいと思いますが、田
の水が用済みになった頃、電柱に貼
紙が出ます。

そして、この「ジャクカン」の日
取りが決まると、その日には、大勢
の人々が、手に手にタマミやら、
バケツやトライなどを持って、池
の堤を上ってきます。水は大体減っ
ているので、あまり深くないのです
が、芋の子を洗うように池の中は
人で一杯になり、フナやらウナギ
やらを捕っては、岸に上がって、
トライの中に溜めてゆきます。男
でないと、とても泥んこになって
池の中には入れませんので、岸に
立って眺めていますと、シバエビ
がたくさん泳いでいます。それを
ソーケのざるですくって捕りまし



▲昭和15年頃の釈迦ヶ池

た。また、泥貝というか、カラス貝
というか、黒い貝も岸近くで捕れ
ました。このエビは、よく洗って、
カキ揚げにして食べました。佐井
寺の人はこのエビや小フナなどと
大豆と一緒に煮て、雑魚豆といっ
て食べるようです。皆さんの捕
れた魚を見ると、一尺程のフナ、
太いウナギなど、みんな持って帰
って、親戚や近所の人に配るのだ
そうです。激んでいる底の泥は、樋
から流れていきます。ジャクカン
の後には、白い鷺がたくさん飛ん
で来て、残りの魚を食べに来るよ
うでした。

吹田にはきっと古くからの暮らし
があったものと思われま。伊射奈
岐神社、素盞鳴尊神社、垂水神
社などの多くの古社があること。
また、瓦窯跡や須恵器のかけらな
どが発掘されています。まさに、
自分の住んでいるところに、土器
や瓦を焼く窯を、既に6世紀には
築いていたことを聞くと、遠い過
去が急に近くなった幻想をおこ
させます。

この釈迦ヶ池や紫金山の周辺は、
吹田市によって、これから公園
整備が進められてゆくとのこと
ですが、これからは、池の景観も
徐々に変わってゆくだろうと思
います。まさに、このような時に
、ここに住む喜びを更に掘り下
げ、古代と現代をどうつないで
ゆくか、よい知恵の原点を探し
て、暮らして行きたいと思いま
す。

龍か蛇か主たりし 池の丘に住み
夢みる思い 水に浮かべん

(やまぐち よしこ
五月が丘在住 日本民俗学会会員)



▲吉志部神社

本殿は七間社流造で府下では珍しく
大阪府指定文化財となっている。

府指定文化財 円照寺木造准胝観音立像の修理事業

吹田市山田東3丁目にある真言宗円満山円照寺は、本市でも数少ない真言宗寺院で、寺伝によれば、仁寿3年(853)、比叡山三代座主となった円仁によって開かれ、以後、真言宗に宗派を変え、現在に至っています。

中世の戦禍を被っているとはいえ、本市では数少ない密教の法灯を伝える寺院であり、それを証明するかのよう、木造准胝観音立像、木造日光・月光両菩薩立像の合計3体が、大阪府の指定文化財となっている他、多くの古文化財を今日に伝えています。

大阪府と吹田市は、このうちの木造准胝観音立像について、昭和62年度の指定文化財修理事業の一環として、補助事業を実施するものです。この像は昭和45年2月に、彫刻第1号として、



▲修理状況

大阪府文化財保護条例による指定を受けたもので、像高は100cm、カヤ材一木造で、9～10世紀に広く行われていた翻波様式が髷の各所に見られ、市内では数少ない平安仏の遺例です。長らく奥之院に安置されていましたが、最近になって、江戸時代中期に行われたとみられる、手や足部の補修部分の剥離が激しくなってきたため、これらの部分を解体修理するものです。

修理事業は京都国立博物館内にある、財団法人美術院によって行われています。ここは国宝修理所とも呼ばれ、国宝・重要文化財をはじめ、多くの指定文化財の修理事業を実施しているところで、いわば、彫刻や工芸品に関する総合病院ともいえる施設です。殆どの仏像は長い期間には、いろんな人手によって様々な修理を受けてきており、また時代とともに信仰の形が変わったりして、造像期の姿が残されていない場合が多いのですが、今回の修理事業に際しては、解体にさいして各部の詳細な調査がなされるため、本像の旧態を知る大きなチャンスであり、その成果に多くの期待がよせられています。

◀木造准胝観音立像
修理前の状況

寄 贈 民 具

(昭和62年4月1日より昭和63年3月9日現在)

寄贈年月日	寄贈者(敬称略)	寄 贈 品 名	(数量)
62. 4. 20	中 村 義 春	太 鼓	1点
62. 6. 1	西 村 公 朝	五衛門風呂	1点
62. 6. 19	早 田 隆 三	用心太鼓、台ランプ、吐月峰、桶、鳶口、提灯、袖搦	10点
62. 7. 3 62. 11. 6	矢 橋 繁 雄	とんび、下駄、草履、木綿布、蚊帳	8点
62. 7. 22	寺 西 不二臣 聖	蒸籠、千石とうし、唐箕、行灯、桶、枘、ランプ、チギカキ、燭台、洗面器 他	13点
62. 7. 22 62. 12. 5 62. 12. 14	吉 田 禎 造	カキ、米じょうご、桶、籠、チンチョ、たんご、馬力重箱、あんか 他	41点
62. 7. 22	柚 田 位 明	石臼、じょれん、簀、粳おさえ、おおこ	5点
62. 7. 22	竹 原 重 光	桶、味噌桶、醤油壺、籠	4点
62. 8. 12	岡 本 利 夫	ふいご、カナバシの鍛冶道具、鋤	10点
62. 8. 22	山 口 正 文	鋤	1点
62. 8. 25	榎 本 広 松	唐箕、鋤、鋤、くまで、ふご、唐竿、田植えさしなど農具餅箱、コボ、飯ふご、もんどり	35点
62. 9. 7	北 田 祐太郎	鋤、唐犁、じょれん、土きり、カキ、粳さらいなど農具白、籠、テオイ、ケハン、モンベ、パッチ、上着 他	46点
63. 2. 16	稲 浦 重 男	メチゴテ、石屋石標本	3点
63. 2. 29	黒 田 保 夫	唐 白	1点
63. 3. 5	澤 田 貞 治	鉋、錐、正直、銚、カナベラ、ブンマワシなど桶屋道具他	139点
63. 3. 9	小 山 勇	シャクリ、墨壺、鉋、のみ、鋸、錐など大工道具他	99点

御協力ありがとうございました。